

今村欣史

承前。

先生の書齋を訪問したのは、お亡くなりになつてから三年近くが経過していた。ご息女の初美さんが整理なさっている最中のこと。

どの部屋にも文字通り本が山積しているのだが、押し入れの中にも資料がいっぱいいる様子。

初美さんがおっしゃる。

「ここを開けることができなかつたんですよ。前に本がいっぱい積んであつたんです。開けたら中にダンボールがいっぱいありました」

そのダンボールの中にも資料がいっぱいだ。本以外のものがいっぱい。

そりゃそうですね。97歳までずっと書き続けてこられたのだ。資料も溜まって当然。わたしでも困っているほどなのだから。

書棚にもスクラップブックがズラリと並んでいる。ほかにもノートがいっぱい。

初美さんが手にしておられるノートを覗くと草稿らしきものが書かれている。推敲の痕がある。どこかに発表されたものだろう。

そんな中で、「こんな物が出て来ましてね」と見せて下さったのが、立派な本。なにかの全集のうちの一冊のような。

「開いてみましたらね、日記だったんですよ。だけど知らない筆跡だったもので、どなたの？と思ひながら読みました。そしたら内容から考えてやっぱり父の日記でした」。

松江高校時代の日記だったのだ。インクで書かれているが、なるほど、わたしの知る先生の筆跡とは違っていた。

いたるところにカットのような絵が描いてある。それが細かな絵だったりする。これはいかにも杉山先生。お若い頃からこのような絵がお好きだったのだ。

日記はずっと続けておられたようで、先のものとは違う小さな黒いノートが机の引き出しの中に何冊も詰まっていた。それにも貴重な資料になることが書いてあるのだろう。戦前から戦後にかけての詩人の動静などが書かれているかもしれない。先生は講演などでたくさんお話になつてこられたが、話し漏らしたことも記されているのではないか。

他に生原稿もたくさんある。出稿したものが戻つて来たのかも知れない。

それから目に留まつたのが雑誌類だ。わたしの知らない雑誌がたくさん。

「詩火」「制作」「文學館」「文学雑誌」「シナリオ学校」「創造」「人魚」などいろいろ。多分戦前から戦後にかけてのものが多くあるのだろう。

初美さんによれば、「父のものが載っているものだけです」とのことだが、それでも種類が多く、今では入手できないものも多くありそうだ。

